反故さがし

863
135

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』 請求記号 863-135

ガラス使用

863-135

序

甲一百童居士。自幼慕蕉翁之風。善誹諧之體。四方騷雅士。游于甲者。皆主居士家。應酬咨和。易賓而不易主。詼嘲笑謔。靡〻如鋸木屑云

辛未歲以病而逝矣。時年八十七。其子百二又奉先人之風。吟哦不廢口。今茲大祥之忌。自以為招僧徒修水陸齋而追其福。不如請執友同好士吟咏各首。而奠之

碑前以怡神意也。迺與一義老人相謀為此舉焉。祥成乞序于余。々歎曰。余今觀百二。維其先人之志而能成其事。則誹諧之技雖小乎。其志之厚。吾奚小視之哉。於

是乎序。

文化十年癸酉之夏

江戸鵬齋老人興書

凡例

一父命終のゝち四五年このほと。ねてもさめてものう
こゝろにてあさゆふの机入さくを沐浴しこは
たゞのふみを書れ為に拝しなくてはかなはぬさまなれども
たまたましるしのこされるものをとり出て。のち
一古人を古人とするさへこれハみゆるなきものを
あつめたるこの編なれば
一集中に文字ありなしを見ずのまゝを書
遺し置たるにいま又更にこゝろはれしとかく
て全すさびれと謬のおほからんことを

扨かゝる諸君これをゆるし給く
一くさくさの不足をも編纂すれハ此巻を見ぬ好士
ありさまに知らずなれハあるさし
一斑を見て全豹を評すハ一管中の
ためし是に比して走のあるものなり

反故捜

甲斐　流上斎百二編
丼々橋一作挍

帝国図書館蔵

四時

入あひの鐘撞のまはりにゆく人や　百童

法華経全部五巻の書写終りて

ちらはなきはなみしの夜能学の露

稲の葉のよりかゝる手で吹れか

腸を寄る字紀世の小隅の虫

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135
ガラス使用

出る兒ちの此作善みち

うのさきのうさまし　むし給を開て

瞿粟のひと人ふまハ萎れなんしよ乃　百童

う月十日　鶯あらうきの雲　百二

御香爐山木の葉あ月ならん　如挿

そうらちから乃ゑとのおつアあ　百兒

茶芒ひのかきん秋の景色哉　如童

とさすぬ絵のこ僕あ東もれ　城高

蝉ぬけてちを細うふくし　遊馬

五ふ鷺いそく宇治との狩　登高

あらし吹黄木綿手揉る小腕ふ　淇青

虫ちりの床の室れしらんぬ　為風

老生もとてちつよし鳴らぬ亀の甲　祐之

帆ふ見るまでのう紀世ちかりか　喜樂

明茶咲月ふ無うきし山杉子　一峨

よむみふちゑうぬ荷様の来了　道尾

傍既れ露にぬれたる静か闇　真淳

なかつきをむきぬけされし下結ふ　和童

花の木は候て見ぬると戦く境　一作

蚕きらんのう法しは盃にて　宜樂

猿の子礼病からはれるもの塀に　無端

いつ野のとは字の位立ちぬらし　艸美

古雲や究乃中なる佛達　石敲

くらかと変る謎の解やう　子雄

むしきす大この素湯の涌時分　椿齢

殘ふとまてに打ち飛ぶ手ちかし　一磨

香居ある糸をやさしき笹下風　如雪

馬おりれむしの字ての晨明　巴園

無造作茶さくし汁の露時雨　梅枝

芋掘の坊のなきのひろげる　松荷

常に淡路を気取るさら浪　旭山

定まる用紙小本へ書　李道

石臼の目もあらしのたとへ床
襟ふとんまく 梅川乃諸
き孫馬のうすを必ず往生出くし
大きなつれゆえ別しまゐり
よつて文化九年の花供養
あをゆきかゝぬるゝ花の碑

素栖 桃里 林千 素朴 松保 梅舎

大祥の忌日まて歎しきこの事
法をひいて経文頭二十八句を分ち
枕のし句を法るめて霊魂を
なぐさむ我ら筆をとりて其趣を
信くれとこふてなきさの旅志るす
ここに略す

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』 請求記号 863-135
ガラス使用

暑天にあるを外して古書を
さらけんといひし識のうへにて
はなはだ愚しきたれこれの
よしなかりき

こちら鮭乃腹にさこの寸毛のなかし　成美

埋火を鼻て見られひとわかれ　袁丁

雁鴨の汚す梅の日和かな　老阿

残れ日や浅草ふけて竹の杖　一瓢

露の世とも見えてさつきと蓮の花　車両

背戸や焚ぬ薪も人まかせ　涅峨

よしきれ日もさけ皮や見ゆるもの峯　心非

船納涼我も見られて人かな　凡鳥

大みそか未練なるまもく哭かな　得布

松の色をみしめき夜のむしめや　諌圃

あさこの本の二十日朔日と咲にけり　久藏

また日ねの巣の衣をはなるかれ　九井

花桐にひの末はるの匂ひ哉　青李

青梅や何に小僧の人たのみ　峯莪

六十と四つ見ぬさらは河豚也け　道彦

笑ひし夜に木のまの月のもつれ風　護物

涼しさにはくしかれや咒かる　三化

踏んかけて其のかみ見る麦の踊　宥盧

さゝしさや柳つゝ消る膝れうく　季道

菜のはなや あさましの 網子　斉貨

松影の月に翠簾すく家貸の札　松夫

虫れ夜の不らくとおきに鳴狐　太民

みなの見くらましも面影なる　閑峩

ここつきれ下に曲り来山みたら　一濱

檜原やとえ足見えし二西大寺　麦守

杉苗の根より入ぬらん香の月　一秋

炭竈の檜黄煙をはおしらまに　應々

送一茶帰旧里

雁なてそしくまへよ杖は膝くとも　一峩

吾妻のそらは皆小春也　一茶

こしゆきたれは
ちうそんゆるや
のあの御
くく御
はしめてうかれ
ちもしろさう

てれすは
こもし御やしもし
きし御たし
かりてしまいらせ
まいらせ候
きわるもとと
わもんへかしの

梅もとへ
おりわそよしめ
いるとそく

裏へのはしも炭や小袖この寺　對竹

を川波ゆきのあまりて尾花かな　其堂

春礼日や庭子も莟る檳榔子　白芹

志らぬ人のこゝろも花に見ゆるかな　五俊

我宿は常恵方なり松の風　元朝

霧小紋雲を吹て明しら鷺路　柏舟

日踏てあやめさしたる京なれ　竹馬

須磨懐古

須磨の関乃名をそすみれ夷を咲　芝山

夜川の波を紀雲まてゆくかな　万布

古寺へ引込まれたる尾花かれの形　曇潮

暑きかや人の出這入まかねの窓　可九

花垣の庄へ入なれぬ旅はんの月　ノ旦

花見ころ市ゐる宮をなまのしき　午心

真ん丸月見て亀戸をはやくます　完来

財散則民豊

山さくら結め花つまれ来のちる　梅壽

月さきは塊れ口尤凉しみ花　詠帰

美しき人のそて浴や初しくれ　周化

待花の夜ころ不寒るす　蚊帳　仙骨

はな盛大佛さへもはらんあまき　司風

川さこの木の西あまきまる麻花茂　元風

我のの肩をとのくたなれ汎まの月　来蘇

霧雲つや大手へ這入軒さこの礼　五風

傘や横ふしくるく渋そちる　少年　徐栴

鳴まそ色絵のさまれとするを　同　兎一

よしきわれ梢ふの隣る昇さこの礼　白也

萱の中き八花くまきよぬれて夜の月　春樹

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135

ガラス使用

よる泡のきゆとまもなし六合飲の花　一阿

草かる夜は長しと思ふ色もなく　鬼洞

よく寝て起て見ふり草紫苑　西ケ

菜園の豆を唐比丘月夜　葛流

青柳を潜わらく色め角力取　昌安起

秋立やいつまで旅の笠無墅　嵐伯

虫とも小鳴きまぎらまし　小家の前　一豹

居風呂に鶲うけ待や秋の蛍　恭里

やり里をねつゝ見くれ袖るを　好古

秋の蛍こゝろもあかれ鬼の来る　橋水

花季も小引きもまぎれし　小橋武　宇橋

草小木みなとめん見てぞ秋の月　寥松
雉も鳩も日永し冬されの峰　守静
矢背に焚火も太もの夜の霧哉　明良
鵺のみその耳清き通す月の門　延年
無花果れあらいふ名のる宵月　芦圓
宵月や錦子見ゆる塀の内　其道
紅葉見れうき朧隣あらこゝろく　一哉
多仙や洗ひ髪もしの新さゝす　一牛
松柏にまかりに掛て秋の月　醜我女
去る雁もなに生れ来しきめてふ　保業
拂子や秋ここらも汲の来る　青亀
蕎麦や川錦の流る岸高し　玉匣
蝉の聲子の日くしふこゑから探　一鷹
湖のもろきしや帰るれ山　道也
去る迄や小来て居る安臯寺　瓢傘
うくあれ吹て見るさんぬ扉の石　直也

十重子小粂の流く梅の蒼一の糸　菓兆

うき草のきれにつくや子れ哉　万外

まつしくまで四月乃釋迦を出さぬまち　彩羽

蕗のはる柏ものうらは淋しさみ　起石

五月れ二十日にちかぬ錦所系　至鳳

塩引のあらかとくまもくれなわ　四貫

春秋風旅売る釋迦をれつるてよ　風谷

廻文　二句

日々街の永きすその乳のし鮑　故園

狸ふと思ふまゝなしきこきぬる　素玩

天王寺札とりれ銭をゐて

つしや縄の這ひらぬ糸のつく　一裁

雑

月花の拍子木のるや臼札吉　峯巌

別戀

似るさ美をとなし合ふて見る笑かほ　作者しらず

ゝ咲て名もしらぬ花や
それ白きもの川まて
子をあつかひ帰れ
敵あるし花ふ降
火宅の栖にもそし
絵も旅ゝ仕ぬ見世中よ
千よとひ寄りて秋の三

子ぬ河や夜とはなとけ
付て帆も浪に浮し笑もと
戸綱ゝ分解
三ヶ月し　東義
底ぬる仁見
行之ひ

青くもをうつして涼し竹階子　雙鳥
やせふりまたからまでも紫蘇し　星布
春雨のあしをむすぶ菜屑かな　園村
之扇の絶うちふらし聖菜哉　燕市
浴衣めす大臣人す外村哉　有圭
湖のさ紀の水を見えて立蟻哉　斗月
山里や日ぐれの松もなゝの春　任只
夜すがら橋春の限りを乱れけり　圭夢

あさ顔に淋しさ語る戸口の菊　素鈴女
つゆ乾く庭めぐる桶やつまゝ哉　周也
蟹去りの傘ならしこれ哉　東子
稲舟の羽音追まはる志さま哉　周和
労れ寝や二十九日の月の影　東鶴
美しき夜のさみしう見ゆるや枳殻垣　麻生
淋しさを見に寄る花の薄かれ　五渡
踊る夜のはつれや餅の銭子展　大兆

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135　ガラス使用

白壁の雲さへ春の山の家　路芳女
梅咲て毎日天敵よろつるし　喜樂
十月のかきつはたかすみ田川　梅吏
鳥ら鷺を見しきまの上そ杖や手　えまゐ
躾しの菊葉にかゝる二つ緒の笠　不二
売くらし木も樹仲間よ五月雨　黍旦
山葵茎や三日月色の鮮　宝水
究盤の杉葉引て亦小ちらぬ　有郷

海子香そつき色つきもよ寺の昏占　和調
うら町や留守もき借てる好やの楼　古言
来からしや扇子借まする山の馬　呂律
掉く秋や後の端をのこる叶鐵　也好
日を西へ飛うきてためみちさる　道布
山裏や盃乃こゝ春みよ絲この御　き久仙
番匠よむらさ紀妻をとの畠　家縄
正月を笠に花るらし　悪太郎　碩布

志る人の杉にものいふ春の風　一峨
か氣絵ふ来て二日酔しぬ　成美
帰る雲額ひ淋しき四十雀　峨
塗の宂さへともし絵の母や　美
法螺を吹身の北も南かく　峨
魚乃声も義然下　雲　美

更箏に謡をくさる秋の暮　峨
たのし傘を泪く入佛　美
火踊夜霧に小家の新族踏む箸　峨
百合りさけとも男泣かれ　美
棹添子夢路よ夜の泪くと　峨
朝起形らふ四五日の空　美
薬氣にも也道に身の栗栖理に　峨
うれさしとそいはる布貴　美

小袖のつまに年よる月の露　峩
行燈 冷かし吹ほそき湯の湯ゝ餘　美
何のそらの花ゆきき夷の春にて　峩
待居渋しにしたる百姓　美
酒のミの膝形孫をかき寄らし　仝
鹿児嶋笠にのりたる白雲　峩
形くずれし額の手拭を襟にかけ　美
夢のうらし銭に消ゆる埋火　峩

衣くの宿を業責に硯うれけり　美
二の暮湯泉の口を觧て来るし　峩
物臭や疎好む長き臯月立　美
河童にうたれ桜もたれ侘しき　峩
馬ちらりとつけに渡る佐谷の石　美
思ひ起ししてハ笑ふ氣遠　峩
十六夜ハ菊もくしくも明け星
露に中川わたる秋の錦の影

門人に袖をひかるゝ旅袷
風

節穀虫のなくまで宿へのさん　澧水
納豆や五こ丸桐の小座を　蔦三
十月のはもさむにあるさくら花　叙来
わしまはくらぬ松の巣作よ　玉珂
蜩や挽かゝらせる鑑札との　三芝
菊苧の見えてもこゝし山の上　方解
冬枯るや野にひらく笠一新家　雉啄
葎の戸蓋まて小麦もよそわかな　洞々

馬に鞍くらるをとうく見はる月　他阿

朱らきれ梅も月に面ふく　雀子

やるるのたゝむ　谷宿よりをきぬき　嶌月

秋風にいろきをうけゝる木芽かれ　竹旋女

きのみや嵐の音よい秋く達　鷺白

置露の根もの見えきくや椎の下　鹿太

盆まへや名を見て来るそれ家　月鴻

雪をたま事に中のやうされ藪　篆丈

旅きれもいくつもある芒　秋の夕　和角

侘果てきぬもすゝきも　山の芋　石海

しくまやその日ゝさ旅の花　喜年

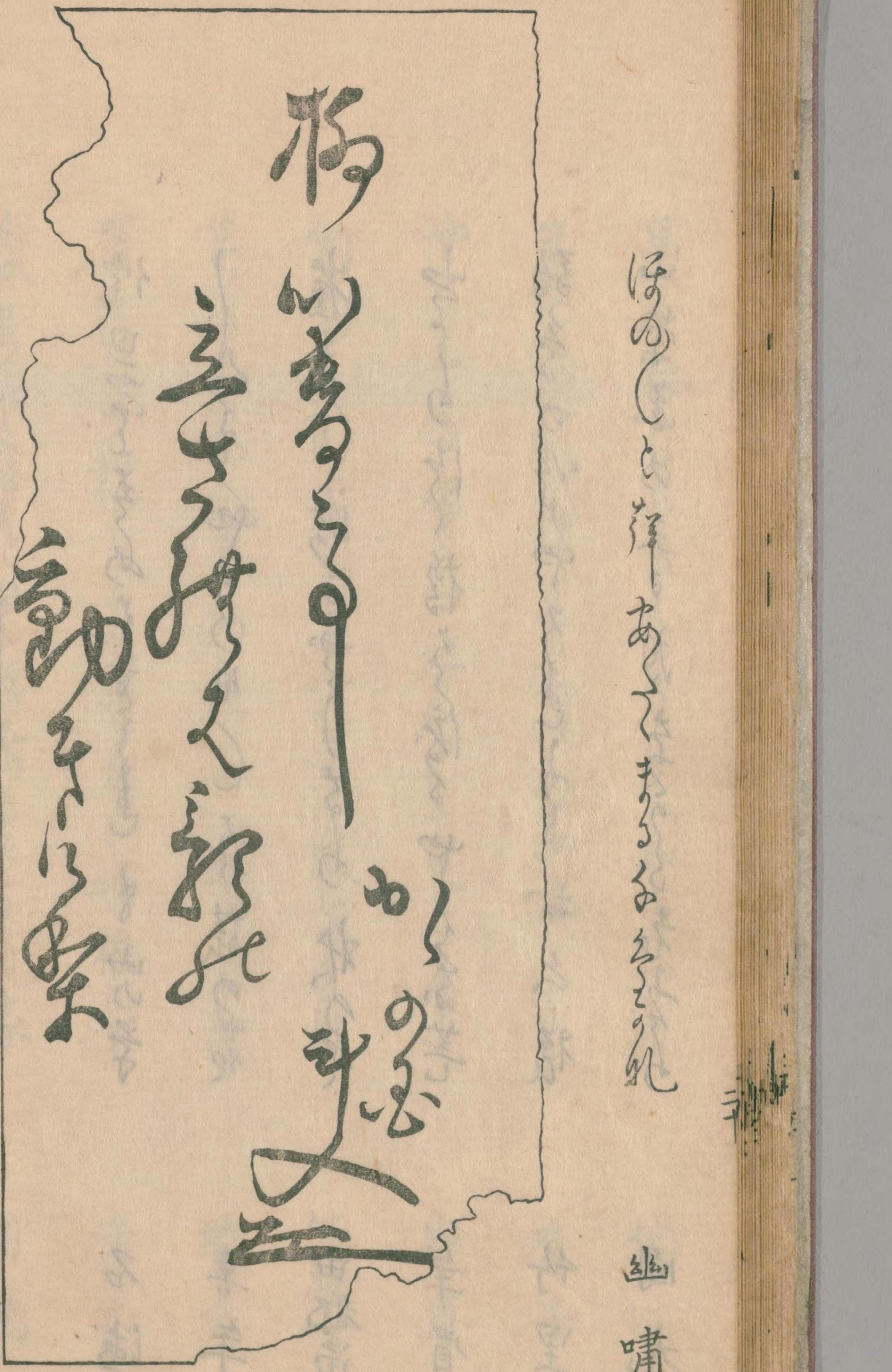
崔まて流るゝやうりなみ　秋の風　由都畄

山とみ流し橋たゝ濡るやなかの芒　年眉

弱るの色やみまへよも　おかゝ槇　竹里

山茶花の三日月をそゝる志みるみ　國丸

ほのしと薄あてまるゝ夕ぐれ　幽嘯



むさし山に比良の濤見て暮くれぬ　眉山

病後

ゑいやつと生たところが秋の暮　一茶

たよの日よき人の訪ねて秋のまつり　素檗

碁の手見れ越方あれや夕の路　若人

三日月を呼つて来まうなるうつの山　葦雨

旅人のをそしくみてんめの花　武曰

餅果る庭りく俵をうくや椋の新　如毛

何事を我れに告るぞ秋のくれ　雲帯

南ミふよ紀里見ゆる春の山　几雨
やかれ来りからよりも萌遅し　帰杖
小さききさはまけ尽し秋の逢　士朗
蕾の雪一時さこのわ人を来れ　竹有
きのふ見し倦ふもあらん梅花　岳輅
安井川にて
名月は砂にあつる瀬のおと　梅閒

見る人の花のあるし花山作久さん　鹿野
ゆふ納涼琵琶を菜臼をならべこ不　李臺
小娘やものさまよる雪の中　秋峰
宗や我に膓のおきとく結　逸人
山里や芸はちかもんめの花　五雄
鹿の声は来るや庭木の寐覚哉　東陽
寐ころ画も逃れ数る小はきされ　千阿

いろはもちらさるの蝶し神無月　草人

粉の子れ書ははるしらあしらひ　智翠

霄やこの影ふかの匂さる攝つの那　木芽

御山寺の雪や戸ゝくまらの枝　阜池

あさかほの花ちら向ふに咲かわ　申齋

逢坂の小庭もちらゝる那芒　千影

家鴨留るこの三条尻むまて秋の庵　鳥頂

合点してきけと寄おと常穀　亞濱

橘の葉ふ山かつのくまてむくき寺　志宇女

そゝ落る葉つの大かりし廿日月　春雄

霜との礼や庭てらと低き畑の家　斑車

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135

ガラス使用

一りんのやまきつゝら枯ちしめ哉　和山

枯のうらに手くるゝ人の泪かな　空阿

河に入てゆらばなかぬほとゝきす　蒼虬

人まちぬ身をたつのしおぼろ月　瓦全

ちるのきれやうらし春のあさぼらけ　文尨

蕗さへほそる雨を操まきれ　奇渕

[illegible]れ蚊のとまり直して初時雨　井眉

二筋もいらぬる菴の雪れ花　星謡

ほうとん咲孫とあそぶのにくしさ　長齋

梅ヶ枝のそゝけて岸れゆふ日の乱　竹齋

袷とも定めこのころ竹の中　三津人

山寺の宿のさくらを売木か　米彦

鮞焚ん梅四五本の庵の冬　紀外

夕立に舟をも押きらぬ旅ころも　月居

晦の月も上もなきこゝろかな　魯隠

こまかのある雨降のうゑ田かな　蹈る

飯釜をみつく空なり時雨雀　万和

ましらやもみの上れ山村雲　荷涼

春ひと日みなも酔らん桃の花　八千坊

嫁者や原よし原れ馬の上　友国

ちつ花や二日うつて出の喉　升六

雪空や海士の夕餉のけふる　一草

住人をいつこ作なれちる花の間　桐栖

梅を出て野中物言の一木哉　喜齋

耳みゝる蝶をひとつ松乃中　釆和

縁雑まぜる札みまるてわみなさる　玉房

材木の夏買海士あつるかな　不海

ひとわ蛸釣ふちをなやきけふ屈ず　樗堂

わかとるゝまも鳴ねとちれ一葉　篤老

麦生えてあをらひまき山家かな　玄蛙

夕くれや紫苑にうつる山の影　閑齋

冬山や鹿のまきれにかすみける　武陵

なさ見まきも常そ梅の花でこそ　菊也

星の夜をゑのまち藪に更しけれ　鞍風

はらゝ白き皆消ふなわ不二の山　天外

蓋とるゝ京ふ菅ゆく秋の下すゝの夜　丘高

鳴捨てりに枕居花もやさらし　椿堂

葎の戸を行ての音するう霜の朝　鶴鳴

大江ふ落るやあく度蒐の家　推已

あくまれぬるのてらしけ雪の山　ひろし

五月雨ふ馬の尾乱きさみされて　滄波

嵐のそら夢や竹のなかの遠際　為徳

ゆくてきりし戸をおさへ松本萩の餅　巴文

涼しさに牛もなめくむしのきり　路白

撫子や袖にも足らぬ花の露　素迪

炬燵の親二人にあるも更にあり　雨塘

啼鴨れちのつきふえて寂しけれ　只直

喜ぶ野もやさ花見て来たる時にあり　恒九

秋しらず山泊里すまはせて新酒かな　至長

来て見ればさてなつき遠れ山寺かな　竹加

紙帳しなき蚊に虫も見えけり　去雲

うハ原の桜の見えて広き寺　文水

青柳にぬれまし京へ這入り　田美

神垣の梢ちらくちり伊勢山　蒼峨

ちる木の葉葛を桜に見たさそや　青岱

雲雀や葛れ花咲く人の家　蘆月

おもてみちの花散しき津唇　唯乍

大なるも小なるも文る花見えけり　畝人

仮神の籬でもなれ芸この柳　可長

竹の戸や凍を吹こむ春の風　鶴羌

埋火のけふも夜来菜汁哉　月船

更衣二月も清和の日なるか　近嶺

掛ての達磨の杖よ五月雨　素綾

背戸口の踊を留て寐る代なりけり　八重女

灌仏に谷れさくらまた咲よるか　一白

芦行のかなるや夏羅をまなあれと　升入

竹しやいくら咲ても枯れまま　南道

春れ興をちらりと見るさくら小松原　その

酒のみ小見あるさくもなき雲の峰　金堤

蝶むきや行の社をおもしろき　少年 鞍丸

茶や峠あちぬけの帘　桂之

春経てもまされのるや鐘このまま　太舫

葉さくらや人たゝれ木とよれた陽に　輪之

月しろ夜をこのさき探し閑や枯梗　媒柯

うの花やちらして閑れ傍に杭　野翠

鹿啼や皆中今世にみもん岳で　里丸

拙くしとあさ顔咲し庭のさは　白老

杉風をまつ鏡て為らす月よしの哉　杉長

杉なみのつきすとなる夜明らかな　郁賀

息災なおやをあむや演棋　宗拱

海音と我らは中よくなりぬ　也草

そこら中夜の明て落てまた咲　其文

露しふ来てつゆ流く戸口哉　盧一

すゝろ流く盲子に萩の畔　草史

木ん伐に楠をせゝるのほとゝきす　鳥周

足もとのあかるき山や蕎麦の花　晋記

空のさまやうし桐れ一葉流く　卒山

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135
ガラス使用

うら家を覗きこのるや草の雉子　素英

菜の花や紫麦にちかふる　随和

松風や梢のけ上て松の月　卜甲

春風やそこらてきゆる錦の芽　蔵六

蝶のさひや二月の山とりふ日よわ　湖中

志賀柳のたまきのりしさよ莟の花　松江

そよくふる小松実見えうれ芒　義香

うきに雲ふ分をそむきふつ吃生　仙雅

鳴や蛙ふるあきのされえねの松　利根古

小柴さす神いさんませぬつ巌　阿童

山の月あらはれ出ておりし菊さかん　乙二

あききぬと風来てそよぐ細縁かな　冥々

かつらきの神の機嫌やたれの色　秋ま

まくらから夕日さしけり九月やミ　連々

逢ひ雨のうれ野の吹れあまつかな　與人

牡丹まてうらしかりせ二日月　麦市

積る雪やたえまきこゆる夜一の声　雨考

冬の夢へまてにくまちかや書窓　日人

銀河秋ひともちれあかのしと　雄渕

たらゆきれぬつまふうかや東海　文郷

あらしとも見ゆるしくれのこらぬ　きよ女

盆の竹て神秋らしや月の新　巣居

宿の躰や花を思ふを二割まし　且々

涼しき夜の月の小窓へんみやる　為代

まさしく家仏海を上座の礼　三及

まれ潮こまて来なと遂て見る　沾橋

大雪驚横梗
玉堂無世赤
送鶴林寺

佳川画印

鳴蛙ちてのぬ堤より〻の中　李角

松蹊にて
此蹊にも志くれを置てしくれかな　楚山

笑れまの口癖に由きの縁　子訛

亡妻のもてあそびし
盃をとり出て
とりなれしそのあるじの月し　素郷

三日月にまつや魚見肴との乱　野松

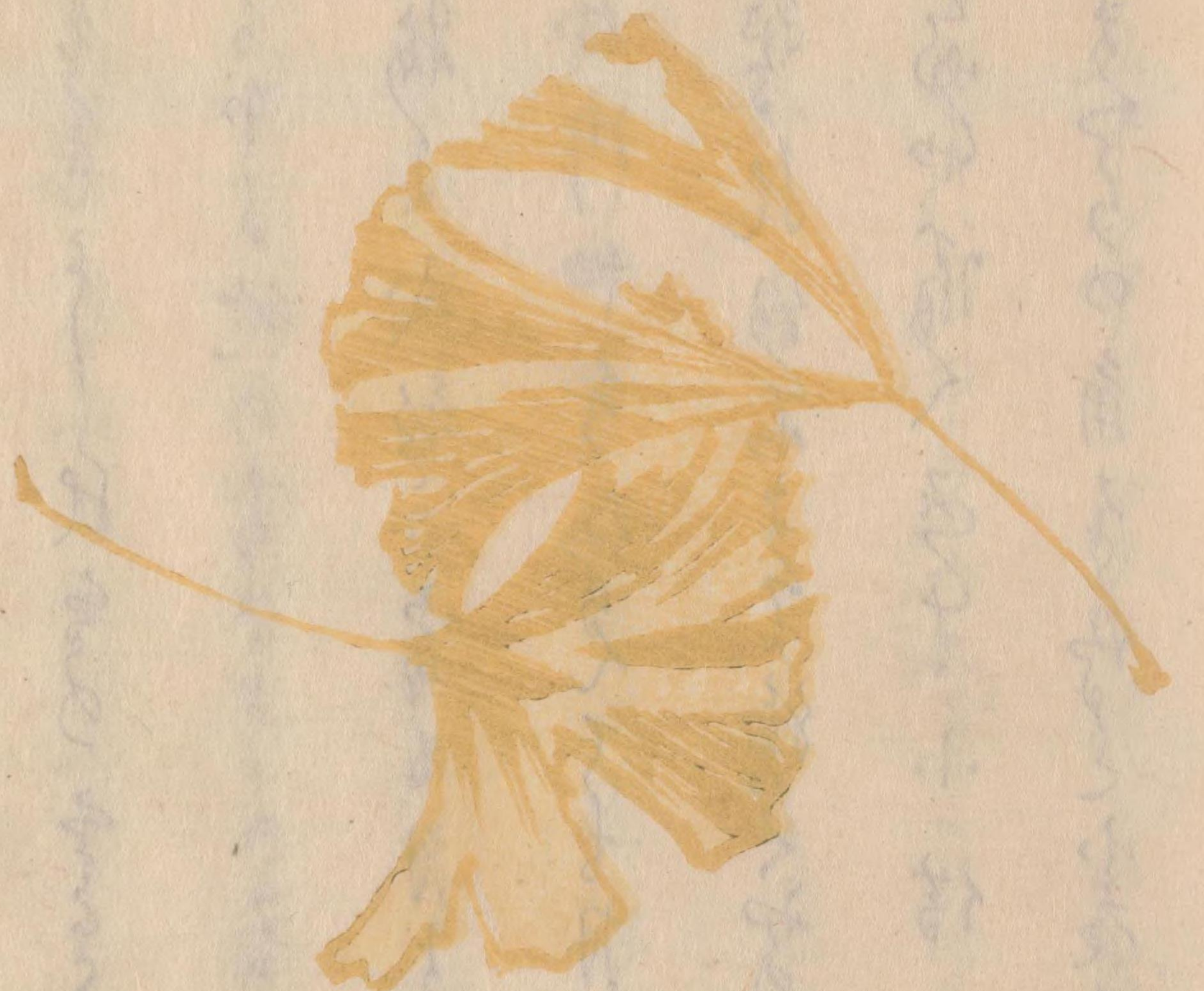
冬の夜や枕の哀れをもて遊ぶ　河道

ゆふ来はる
く風しかうして
梅若き旅らん
此ハ宿九面る経

時ハ風は

今尚南雅のさくらかな

武田信玄



むかしふりの
翠右近
菱東主序

梅に坂を追て森へかけ里　草鳥
花なきをしれ雪のさきされ　豊松
踊りかる蛇のなかとさよのうすれ　連雪
冬梅に武蔵の宿も月よしの秋　遊耳
加茂川やうた仙見ても月見する　専阿
冬篭れ独かまて讃くゆの月夜　未帰
春雨や備く五月に借郷　貫珠
木まくらの角をかけし小夜千鳥　圭兒

結直す帯にはまれ名残にき　東之
鳴きれいつらみてさよ晴れ星　桂塢
孤の庭にふる落葉ちり　真澄
露のけや畔にめなか松のいろ　三甫
夕風や雲に目にほく晒川　喜水
青々とれ木の陰や彼岸の梅への　省雅
轡の宿月に木の間をあらはれ　可交
啼鳥や掛てもみえん山の花　五芳

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』 請求記号 863-135
ガラス使用

案山子なきとのいはひ哉や須磨の里　梅柯

すん枝を雀にゆらく萩の花　幸雄

川芦の聲もたつらん通ひ鐘　雪甫

吹なくまてゝ吁耳に帰る哉　卜阿

住て成る庵滄の菰やうもれ然　牛止

山寺へふとん貸たる松の月　草鳥

ほとゝきす鳴わたりのこゑ
ふる角やおもひもよらん
世は縁乃雨をしむ毎も折え
ほとゝきすすれ
中ち望

秋涼し夜盆とちかくなりけれ咲　真清

鹿の聲夜も嶮岨をものかハ　思諒

草小草夕ぐれにして灯とも虫　こしを

花芒咲ほと咲て月にかゝる　鷺雪

峯雨きかや雨ふる中の時鳴か　孫彦

山里や庭花咲ても家ほとる　少年 金系

穂麦積ゝ新も猶子の且ゑ　昨非

いさゝかれこぬまでふきこのよめ　亀齢

文月も十日と老し桔梗この野　草丸

尼寺に瞿粟をちからも菫れ蕊　重行

その時やみなちらされぬ時鳥　梛後

いてさらは山のこなたにも夜半の月　石郷

うの花の宿をうき世に思ひしや　南丘

氏のまえにとのふまるとて文ゆる花　太年

世の人氏月にもの見まゝ神さくら　亀孫

星の糸降るの芥まさに乞され雲　夜涼

雪の夜やたれ飢人何隠るゝ　道尾

学れ工ましてみれ二日の礼　程也

志ぐるゝや廿日亥中の内おぼろ　柳覇

葉桜の毛虫にさそれ風の吹　習之

かんこ鳥文に益とも思はれし　蕪田

宿の栗や飯粒のこぼれ月の影　仙朝

柳樽をたゝみ通らせて秋の暮　壽好

夕風や雲にさわるゝ音にあら雀　児鹿

陶器の音あるめし手みれそく　陶氷

新酒にさめて細代をさする梅　艸美

生のふし何ゆかぬ着て膝月　子雄

ひと昼はたえて枯れ枯りぬ　縣子

日れはほるまんに出るひょろ弥　素仙

抑ほら夜をはれこゝろ枕原の風　其雪

茸の気の枕蒼月あやや蟻の穴　飛銭

あふき網や雲あをいる笠宝　一哉

瞿粟の風に静まらぬ西日かな　有斐

袖のかれ松に穂もゆし名の月　鮭文

人並に木履はく夜の月　蟹守

鉢の木の花屋にかゝり暮る時　可都里

夕まくれや松の見えて物さひし　池有

名月や高き樹の生る所まで　呰翁

谷水清き玉の流れにさゝやける　敲氷

蝸牛もほとけん嬉しきひと夜酒　敬父

されはこそ粉蝶のまさりし時の鬼　烏雪

行てみぬ橋やむかしの名所の雨　一作

栽子秋を月に画てあらはれけり　可得

鷺は尾に落くさむやさらさ雨　如仙

枝は花ぬすまれしにかに出窓　桂飄

入月や手植の松も紛と吹　平歡

橋杭の塗はらす秋のくれ　吐雲

唐人は不二を見つる菜の花　固有

何事も嬉しく住居つゞく人の家　安男

置露や新に落る清く松の音　秀哉

緒子嶋や山を出て来る障子賣　花青

さら梅の花よ勝てあるかな　亀泉

ちるや芸虫れいのちのまくらにて　花嶽

撲子の露や緑文角大河　千波

をえもつしされも芸れ強く泉　孔雅

橋杭の汐まて見るや枯葉原　和泉

ちる花やまつる来る真人の物　鬼童

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135

ガラス使用

涼しさや日枝のつゞきに二の山　霄駒
舟の帆にちかくなる霧を見て居ぬ　遊雅
くもとりに月高くなつて雲の峰　花唇
桜咲て月も痩たりかれと寺　鬼嶽
うの花を涼虫の灰乃こぼれ絵　拇枝
むらしぐれまつの梢れも聖仏堂　久丸
旅嘆くと船の峠や国半夜　杉丸
梅さくや追うけ中当は本この修　田丸

古郷の窓より先へ今年月　夏木
山里や春にうくちぬさくら　柏枝
笠ふ垣根をのぼる蝸の柳　古川
初秋やあふなさんやうな菊の家　花蝶
白雲のなき山すれ涓にれ　和拇
帰る来て枕にしらなはなの山　畔丸
松風を波と聴んと蝉が吹　似角
名曾月の月も花にめ　禁川　畑丸

花よしや鮭のおめるくされいろ　兒鷄

菜やされ葛をうしろに添へけり　柏舟

鶴の子に並て後見盃の月　物成

一足ふひかはしはてれあんこする　水圓

ゆきれてまつ芒にうちをあふきかけ　巴園

夜さむや人しの間まに清花の添　淇青

一しくれきまにあつての茶餅の口　槌村

葉にサし味の折より柏のもれ　艸美

よふ菜摘津くり
出かりし秋の暮
石牙

此白石牙のたなゑへし

はつ雪や往来にちる手拭織　漫々

大根をあらふ川ばたや峰の雪　方居

菜畠を踏ふみすてゝ揚雲雀　可堂

淋しさのうらを三節のこゑかな　宝山

ほのかにも見えて梅さやさかな　巻應

石蕗の葉もしきれよりちるさかな　遠明

わらびの喰ふこぼれてちる桜　應明

山茶や仏の前にぬれる哉　布知集

あまそゝれ居身てなけた雲の峰　曽人

むつまじに洗ふ手ぬぐひを松ほくかな　貫素

岩くゞる中細くなるの又出かな　松雫

續ても又くるえよ入ぬ二日月　きの女

雪折の音にも驚て明ぬ月　玉枝

そらそらしらたちけに稲の色ながし　一作

赤松のさらんとして居て鳴る蝉　真つる

埔に入て鬚れをとるたひかな　苔童

松ましき芦ふ池のひつ身寒さまされ　漁筵
帷子や夜いつまて秋風吹　悠哉
宵の間の月も淋しや蝶まつ　鶴聲
あさ顔の花に先たつ露の命　宜樂
人の菊咲ねもいさし淵のかし　土牛
清林の松を宮残り押合ふて　眞洞
秋萩を風置てよる萩の咲　左岳
ひとつ屋根を家続よしふるき　松甫

よき旅や月の下陰分を行　椿齡
萩夢の野をとて来風を吹きたの　喜樂
草の露あれとしそ消て行　長平
鳩のや平山雀小のる月を吐　祐之
楢のうち露てや垣ふ踏の径　百樹
墨染の小村出てゆく無常かな　李道
家の見ゆる野のなつましの霞かな　素朴
こらえの花の見事や畑大山　左説

さのふさしてたまるをや蔵る梅に　平樂

朧や梅に生るゝ人もあり　洪青

呉てやる乳は子もあるや水かける　桃志

明る淀もるのこゑ嵩みさ川　二雲

たぬの月たふれころの露きさと　巴閭

梅かくれ障子にさかる雲ころか　花交

菴の戸やたくましうさなる杉梅　鳥語

嵐とうつく紅葉れ中の丹楓かな　濤花

月とみし又我うつふもくさなり　琴雪

咲まりさふの椿場の忘れ草　左城

春れ多東山子の猫ふのりかな　嵐外

まるしと萩の咲うちやまし　奇梅
秋のくる尾花に風のみえにけり　如松
鹿の聲更に近く気もなき夜に深　亀守
梅に月仰雲つきようは前の花　真貫
宿の月笑ふて出かり気まゝし　鶴尾
蘆澤や秋をまちえて落る鴈　柴車
虚淸きの名紫桜とまりにけり　砂溪
行秋やあとも濁らぬ水の川縁　連水

露けしと染て見ゆる紅山の木々　山泉
翡翠や入日を揉らふ芦の先　庭泉
門の宿や膳のうへ這ゑきりしあ　香城
ふゑをきてみるあさや相ひとも　和童
木の葉しの吹きらし西乃山　壽来
拾ひて清のし飾る小橋かな　松仙
行くと萩見る人の小紫かれ　庭樹
分入まし移鳴し秋されし山　素麟

世中を拾ひ廣げて春くれぬ　奥遊

山を出て見てさへ枕ふさぬ夜に　三調

牛の糸までしのさて薦る花野哉　青帋

岸れ石一丈見えて浅の萱　百壽

人魂の見て飛ぶもあり雪れ不二　西成

しくるゝや不破の関屋の行便り　素原

山吹は先くれはぬまきてこゝろの茎　棗藪

恋の愚痴るりよや八日のきくれ花　尋古

雲を割て出るやてしれ時鳥　松夷

水仙や池まても皺のよる時に　敲揶

神種田や植ふ安つするゝの音　平坡

子の部も見らまてうまれ梨の舞　帋頭

手細工の張笠傍う妻延　遊馬

湖を袖ふ入るやさつれ月　奇石

青柳や小舟のこのられ妹こゝ　砂長

あとしきす松ふめのりふ夜ある也　無端

みだれ池にこぼるゝのれ蛍かな　一雛

雪積やつ田まちの紀夜の静　何鳥

うつらうつらやさのゝ集る葦や盆の月　露涂

笠肩に枯葉踏ゆく夕かな　朝雪

ふれ暇にふてみるもしめの露　非一

よん拜をころりし賀人神田あし　少手 百児

秋もなや保うちて見える廿七の穐　松保

ひよ雛子になやをすゝめ花錦蔦　とみ

はく花に葦を訪ひまれ笑ふるかな　くめ

川筋や柳にさとみえてとまるの風　如挧

生来やまされくるゝに抱ね足　如童

有明をとみゆるあとのまろあんかな　登高

あらさ花ともみる世すぐし四十雀　成高

そましれ花をまれしむかの骨　梅舎

入相の鐘れうしろへ飛いちまこ　林千

酒のこゝに鶴の来るちよの雪の庵　素挧

海の音雲にきこえて冬の月　白梼

うくれむすれ群にみせ鉛やうよ　一磨

春芽や鮭の声このあらくある　枇里

晩鐘のうしろに若の恩よわうれ　如雰

月の寐て跡の志ろさよ菊れ茶　梅枝

ひとり家にさき澤山風のゆく　梅下

袖屏れ戸口に捨てる力起この秋　松荷

春雨の夜もあのつきに来まで　旭山

ほしきれ帰や明石れ十五日　石敲

枳殻の枝をとをまんれ鶴の聲　為風

玉椿砌入陰やをかに冬近　圃桂

こうら家や嵐ぬうちのうつ虫の聲　㐂粟

薮のけや灯のちらちらと時雨降　松保

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』　請求記号 863-135

ガラス使用

追加

詠ちらし雪の松か枝枯さくら　起得

芋掘ふを庵覚へしや星月夜　紫明

やすらひと紅葉を出ぬ海の月　南山

鴨の鳴日に扇わ見え冬これ哉　魯駒

正月や一寸出て来る人の中　風志

六月や上戸の掛し橋乃月　佐ひら

暮れ夜の行燈提て見ありくる　鷺月

流上齋四時

きのふ見し花を作久見に集れなか。　百二

亡父と志くしかわし母美
生集のさかえるを
よ経られてその
芋萸を詠よふ

奥もなき庭流くめる暑さこの野

守ら不二や星に分れて渡る雁

春殘しくましてを暮るゝ丘の家

りの枝を潜まば生柴を夜の月　百二
蚊帳畳据をとめくれ酒ハ熱　一峩
振鞁あやかされ色紀智恵あって　一作
あすかも朝日らし花清れ出た　真清
鯉ぬたの尾ひまぬ漆る美なれハ　巴岡
きらり引をなまて乳数入　淇青

きつ花のはつしもまさ見出て　草烏
浪の具れ乾く起しゐえ　一峩
不驚ゟ茅挟へゆくも帰やらぬ　松保
寺ふえ直すはされれける　百二
九以字を四十女どの書写れ　真清
雪を帯ひふまハりまつれ冬　一作
渡りまくふかる松とて将ねも有きまり　淇青
用なりまき浪の日のまゑ一めちう　松保

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』 請求記号 863-135
ガラス使用

大名にかくされ語れ言ふこれも　真つ子
うらゝ流るゝ天の駒の鶯合　草鳥
児をも携ぬ学れ要する秋の月　一作
露をも携にて嘯にも空也寺　巴固
小荷駄馬いそこの尾を肩にやらん　百二
平気にうちしぬあさとてもなし　洪青
天ん臺に浅らかと並にも市の価　一莪
ふくすまとこらすくまよかにみれわ　松保

よん嫁をやつと見付し撰子れ　草鳥
枕にもらぬやころしの言葉　志つ子
みやつ殺をまさるかれ小豆流りて　百二
粧まる松とれ見らぬ夕見　一作
みゆきるるもの着しうる説ゆして　一莪
志賀の畠のいつきしれ月　草鳥
うそのしと若すか見られて語をなし　志つ子
梨子に嘴付猿鬼れまる　巴固

茂こゝれを何のしるしれ竿の先　淇青

清釜請れはれをほしける　一峩

ひとしと汲の雫しあさおほけ　巴圓

篇のうまゐるなつきれ宿　百二

云つくしく寒小花の噂のさまされ　一作

まなおして汲む霧　美し　松保

百二五　一作五　巴圓四　草鳥四

一峩五　嘉子五　淇青四　松保四

吾友百童汝河世をえ去てより
まや三とせを来ぬ鶴飼川の
水は拗とんてう年流れ去て
咽れ和月弥生時やえる
山はもゝ蔵ぬ昔なからの筆に
志はし嘩やまぬ比孝子百二
父ヶ冥福なきひのさ年既僧侶手
折て供養しぬ　拙こみもとめく

ゆるちそとして佛となるべく
さゝめんと末葉やよし豆越の古
みのおもはれて著く候のしこと
せゝらぎを見えよおもふ作善
みえぬを隠されいとをしし
影見しかしきるもある松の夢
千里西のそよりり一陣の風ともに
吹来て小夜の松なる嵐みすしも

ある老とあるまじき事なりと云す
こゝみいふより悪く理屈をきこえれ
かゝるまどひあひて思ひ見ずして是なん
父の母にまりし道の謎字
なるを固しよやうて反古さかしを
此より出て見るれものと撰し
ゆきとゞこほりとたるしは編て
踏みは佛の誹も功徳に彼

14182

六義九体得しの存ず一字法
まことにも書写しつゝまし
かうやうの類集の作者は久保
田ふ乃あるへし深く是を求
めて見むとて反古携と題し
て凍き言葉と添侍る
今日菴一瓢也

松廼家

一[illegible]

[illegible]様

[illegible]

国立国会図書館　タイトル『反古さかし』 請求記号 863-135

ガラス使用